

劉禹錫の異文化認識

好川 聰

一 はじめに

中唐を代表する文人劉禹錫（七七二～八四二）は、王伾・王叔文を中心としたいわゆる「永貞の改革」に参加するが、その失敗により長きに渡って南方での左遷生活を送ることとなる。まず元和元年（八〇六）に朗州（湖北省常德市）司馬の任についてより、同十年（八一五）にいったん長安へ召還されるものの、すぐに連州（廣東省連州市）刺史に、長慶元年（八二二）には夔州（重慶市奉節縣）刺史に、同四年（八二四）には和州（安徽省和縣）刺史というように、各地を轉々とさせられる。大和二年（八二九）によりやく長安へ二度目の歸還を果たすが、また地方に出て最後は洛陽で没するまで、結局中央の政治に參畫する機會は與えられなかった。同じく永貞の改革の一員であった柳宗元も、元和元年に永州（湖南省永州市）司馬へ左遷されて以降は、元和十四年に任地の柳州（廣西壯族自治區柳州市）で亡くなるまで、遂に赦されることは無かった。柳宗元や劉禹錫がこれ程長期左遷させられたのは、當時の権力者たちに如何に警戒されていたかを物語っているが、エリートコースを邁進しながら若くして政治生命を斷たれ

たことは、彼らの文學に大きな影響を及ぼしていく。そして劉禹錫は、左遷された地獨特の風土や風俗を積極的に取材して詩歌にしていった點が、彼の文學の特徴として挙げられる。その代表作として最も有名なのは「竹枝詞」だが、そこに至るまでの異域の風土風俗を題材にした主な作品を挙げると、次のようになる。¹⁾

朗州司馬期（元和元年～十年）

〔武陵書懷五十韻〕

〔競渡曲〕

〔采菱行〕

〔蠻子歌〕

連州刺史期（元和十年～十四年）

〔沓潮歌〕

〔插田歌〕

〔莫徭歌〕

〔連州臘日觀莫徭獵西山〕

夔州刺史期（長慶元年～四年）

〔畚田作〕

「竹枝詞九首」

まず、そのほとんどが樂府體で詠われていることが目につく。「采菱行」^②以外は、劉禹錫が民間歌謠を採取するなどして新たに樂府題を作ったものである。劉禹錫に限らず、他の中唐を代表する文人達も南方獨特の風土や風俗を題材にした詩を作っているが、樂府體で作られた作品はほとんどない。何故劉禹錫だけが樂府體を多用するのかは疑問であるが、まずその基本的な特徴を把握するために、例外的に五言排律で作られた「武陵書懷五十韻」から採り上げたい。左遷されたばかりの元和元年（八〇六）に作られたこの長編回想詩の前半部は、郎州の風俗について、

戸算資漁獵 戸算は漁獵に資し
 鄉豪恃子孫 鄉豪 子孫を恃む
 照山畚火動 山を照らして畚火動き
 踏月俚歌喧 月を踏みて俚歌は喧し
 擁楫舟爲市 楫を擁きて舟は市を爲し
 連甕竹覆軒 甕を連ねて竹は軒を覆う
 披沙金粟見 沙を披けば金粟見れ
 拾羽翠翹翻 羽を拾えば翠翹翻る
 茗坵蒼溪秀 茗は蒼溪の秀を坵き
 蘋生枉渚暄 蘋は枉渚の暄に生ず

というように、「畚火」という南方獨特の燒畑農業や土地の祭りの様子、船を市場としたり竹で屋根をおおう珍しい光景、砂金や茶といった地元の特産品などが列擧されている。韓愈や柳宗元の左遷期の作品と比べて、劉禹錫の主な興味の對象はその土地ならではの習慣や産業、つまり文化ともいえるものにあり、そしてそこに嫌悪や拒絶感が感じ

られないことに大きな特徴がある。^③

過去の拙論では、「莫徭歌」や「競渡曲」などを引用して柳宗元や元稹と比較してきたが、劉禹錫の異域を描いた文學の特徴の一端を明らかにするに留まっている。先ほど取り上げた「武陵書懷五十韻」にせよ、同じく異域の風俗を描いているながら、「竹枝詞」とは作品の肌觸りが異なり、異域の風俗を捉える視點に大きな隔たりがあるように思われる。本稿では、左遷を経験した同時代の文人たち―韓愈、柳宗元、白居易、元稹―の異域描寫と比較することで、劉禹錫が持つ個性を明らかにし、彼の代表作である「竹枝詞」がどのような制作理念によって作られたかを考察したい。

二 「蠻夷」に對する認識

まず、南方獨特の風土や風俗に對する劉禹錫の基本的な姿勢を明確にしておきたい。

唐代においては、長江中流域以南の地域、湖南や四川、嶺南などの一帯は異民族が住むため、その風俗は中原と大きく異なっていた。北方と比べて氣候は蒸し暑く、文化水準は低く、「蠻夷」の地として蔑視されてきた。中唐元和期を代表する文人たちが南方に左遷された際にも、「蠻夷」やそれに近い意味の語彙を用いて、その地に流謫された不遇を嘆いている。韓愈は「蠻夷の地に居りて、魑魅と羣を爲す」^④（潮州刺史謝上表）、於潮州）、柳宗元は「蠻夷の中に居ること久しく、炎毒に慣習す」^⑤（與蕭翰林俛書）、於永州）、白居易は「昔秦雍の間に遊び、今巴蠻の中に落つ」^⑥（我身」詩、於忠州）、元稹は「昨來 荆蠻に竄れ、分は平生と與に際つ」^⑦（酬別致用」詩、於江陵）というように。だが、その中で劉禹錫だけがこうした語彙を用いてその不遇を

嘆いた例が見られない。この事は、劉禹錫の異域に對する認識を端的に示している。劉禹錫はその詩文を通じて、左遷された土地の風土や風俗を蔑んだ表現がほとんど見られず、その認識を終生引き繼いでいるところに、まずその大きな特徴がある。尙永亮氏の『貶謫文化與貶謫文學——以中唐元和五大詩人之貶及其創作爲中心』でも、韓愈、柳宗元、白居易、元稹に關しては、彼ら自身の様々な詩文を引用して、その左遷された土地が如何に劣悪な環境であったかを論證している。だが、劉禹錫に關しては、『舊唐書』劉禹錫傳の「…貶朗州司馬。地居西南夷、土風僻陋、舉目殊俗、無可與言者（朗州司馬に貶とさる。地は西南の夷に居りて、土風は僻陋なり、目を擧ぐれば殊俗にて、與に言ふべき者無し）」と、「答道州薛郎中論書儀」の「及謫官十年、居僻陋不聞世論（謫官に及ぶこと十年、僻陋に居りて世論を聞かず）。…」を引くのみである。いずれも朗州の邊鄙な土地柄を「僻陋」という語彙で表わしているが、韓愈や柳宗元などの例と比べると、その量も少なく、嫌惡の感情も露わではない。しかも、引用資料の一つは『舊唐書』本傳を持ってきており、劉禹錫自身が異域に不快感を示した表現は質量共に乏しかったことを窺わせる。朗州は他の文人達が左遷された地域と比べて比較的北方に位置しており、白居易が最初に左遷された江州のように、蠻夷の地としてあまり認識されていなかった可能性も考えられる。だが、先程引用した『舊唐書』劉禹錫傳は以下のよう

に續く。

禹錫は朗州に在ること十年、唯だ文章吟詠を以て、情性を陶冶す。蠻俗巫を好み、淫祠して鼓舞する毎に、必ず俚辭を歌う。禹錫或いは其の間に從事し、乃ち騷人の作に依りて新辭を爲し、以て巫祝に教う。故に武陵谿洞の間の夷歌、率ね多くは禹錫の辭なり。

この一段は、當時の人々にとって朗州は「蠻俗」の地と見なされていたこと、にもかかわらず劉禹錫はその風俗を蔑視するどころか、土着の歌を積極的に採録して樂府にしていたことを表している。この『舊唐書』の資料は、劉禹錫が土着の歌をもとに樂府を作っていたことが、宋代以前から既に彼の文學の特徴として注目されていたことを物語っている。

このように、劉禹錫は流謫された土地をことさら差別したり蔑視することは無いが、もちろん劉禹錫の詩文に「蠻」という語彙自体は多く見られる。

蠻子歌

蠻語鉤輶音 蠻語 鉤輶の音

蠻衣斑斕布 蠻衣 斑斕の布

熏狸掘沙鼠 狸を熏べ沙鼠を掘り

時節祠盤瓠 時節 盤瓠を祠る

忽逢乘馬客 忽ち乘馬の客に逢えば

恍若驚麕顧 恍として驚麕の顧みるが若し

腰斧上高山 斧を腰につけ高山を上り

意行無舊路 意のままに行きて舊路無し

この樂府は朗州に住まう異民族の風俗を描いたものである。實際に異民族に接した感慨を述べた樂府であろうが、その語彙は、『後漢書』南蠻傳の中に見える「衣裳班蘭、語言侏離、好入山壑、不樂平曠（衣裳は班蘭たり、語言は侏離たりて、好んで山壑に入り、平曠を樂しまず）」という記述や、この直前の句の李賢注に「糝雜魚肉、叩槽而號、以祭槃瓠（魚肉を糝雜し、槽を叩いて號し、以て槃瓠を祭る）」とあるのを参考にして作られたと思われる。初句から「蠻」の字を繰り返

し用いて強調しているものの、この詩は斧を手に道無き山々を自在に駆け回るような異民族のたくましく生活する様子が描かれており、異民族に對する嫌悪や拒絶感はなく感じられない。むしろ中原とは全く異なる生活スタイルに興味を覚えており、異民族への好奇心から詩が作られているようにも感じられる。この詩のように、劉禹錫の異域の風俗に對する姿勢は、自己の感情を表に出さず觀察者としての立場を保っているが、こうした意識は朗州で作られた詩から既に見られ、その認識は連州に左遷されて以降も引き繼がれていく。このように、劉禹錫は「蠻」という語彙を使っても、差別的な意味では用いていない點に彼の文學の特徴がある。

また、この詩の初句に「蠻語 鉤輶の音」とあるように、左遷された土地に嫌悪や違和感を感じるかどうかは、中原の言語が通じる地域であるか否かも大きな指標となる。劉禹錫は冒頭で引用した「武陵書懷五十韻」でも、「鄰里 皆な遷客なるも、兒童 左言を習う」と、親の左遷で移り住んできた子供らはその地の方言を學んで中原の言葉を感じようとしないと述べている。この句から朗州は中原とは違った言葉が話された地域であったことが読み取れるが、この表現も他の文人と比べれば、その違いが顯著に表れている。劉禹錫以外は、陽山（廣東省連州市）での韓愈「夷の言 聽けども未だ慣れず、越の俗 循えども猶お乍る」（縣齋有懷）、柳州での柳宗元「郡城 南に下りて通津に接す、異服 殊音 親しむべからず」（柳州峒氓）、江陵（湖北省荊州市）での元稹「訛音 繳 繞たるを煩い、輕俗 威儀醜し」（酬翰林白學士代書一百韻）、忠州（四川省忠縣）での白居易「安んぞ政教を施くべけんや、尙お語言通ぜず」（徵秋稅畢題郡南亭）のように、「未慣」「不可親」「煩」など、いずれも受け入れがたい感

情を露わにした語彙を用いている。それに對して、劉禹錫はその事實を淡々と述べるのみで、自己の感情を表に出していない。元稹のように、江陵から通州（四川省達縣）に遷ってからは、「夷音 啼くこと笑うが似く、蠻語 謎にして相呼ぶ」（酬樂天東南行詩一百韻）と、通州の方が江陵より僻地にもかかわらず、幾分表現が和らいでいる例も見られる。ただ、この「武陵書懷五十韻」という、異域に對する好奇の視線が垣間見える長編回想詩が、朗州に左遷されてすぐの元和元年に作られたことは留意せねばならない。韓愈や柳宗元、元稹が左遷當初はその風土風俗に嫌悪を示しながら、程度の差こそあれ徐々に理解を示していったのに對して、劉禹錫は冒頭で述べたように、初めて左遷地の風土風俗を描いた詩から、すでに南方獨特の風俗に對する嫌悪や拒絶感を持ち合わせていなかった。しかも、中唐文人の中で、劉禹錫の「武陵書懷五十韻」に先行して南方獨特の風土風俗を描いた作品は、その前年に作られた韓愈の「縣齋有懷」と「赴江陵途中……」しか見られない。つまり劉禹錫は中唐異域描寫の黎明期から、こうした認識を抱いていた點も、中唐文人の中では特異な存在といえる。それは、劉禹錫の異域の風俗を題材にした詩が、他の文人たちとは異なった展開を見せていくのに重要な役割を果たしているのである。

さらに、こうした南方異民族特有の風俗を積極的に觀察して記錄に留めようとする態度は、南方の恐ろしい自然現象を詠った樂府にも見受けられる。次に挙げる「沓潮歌」は連州で作られた樂府で、南方の高潮の様子を詠ったものである。といっても連州は内地にあり、海は遙か遠い。その序に「元和十年夏五月、終風駕濤、南海羨溢。南人曰沓潮也、率三更歲一有之。余爲連州、客或爲予言其狀、因歌之附于南越志（元和十年夏五月、終風濤を駕し、南海羨溢す。南人曰く沓潮な

り、率ね三たび歳を更むるに一たび之有り。余連州爲り、客或るひと予の爲に其の状を言い、因りて之を歌いて南越志に附す」とあるように、實際に見たものではなく、客の話から興味を覚えて作られた樂府である。

屯門積日無迴廳

屯門 積日 迴廳無きに

滄波不歸成沓潮

滄波歸らず 沓潮を成す

轟如鞭石砭且搖

轟として石に鞭うつが如く砭^{かた}且つ搖れ

互空欲駕鼉鼉橋

空に互りて鼉^{づた}の橋に駕せんと欲す

驚湍蹙縮悍而驕

驚湍^{せま}蹙り縮みて悍にして驕

大陵高岸失峒嶢

大陵 高岸 峒嶢たるを失う

四邊無阻音響調

四邊阻む無く 音響調い

背負元氣掀重霄

背に元氣を負いて重霄に掀^かぐ

介鯨得性方逍遙

介鯨 性を得て方に逍遙せんとし

仰鼻嘘吸揚朱翹

鼻を仰ぎて嘘吸し朱翹を揚ぐ

海人狂顧迭相招

海人狂顧して迭いに相い招き

鬪衣髻首聲曉曉

鬪^{ばい}衣 髻^き首 聲曉曉たり

征南將軍登麗譙

征南將軍 麗譙に登り

赤旗指麾不敢囂

赤旗もて指麾すれば敢えて囂^{かまびす}しくせず

翌日風迴沱氣消

翌日 風迴りて沱^た氣消え

歸濤納納景昭昭

歸濤は納納として景は昭昭たり

烏泥白沙復滿海

烏泥 白沙 復た海に滿ち

海色不動如青瑤

海色動かず 青瑤の如し

「屯門」とは廣州にある山の名。ここ數日つむじ風が止んでしまつた嵐の前の静けさから書き起こし、石に鞭打つて空に橋を架けるかのような高潮の激しさや高さのため、高い崖までも呑み込まれて周邊一

帯が水浸しになり、音聲がよく響いて通る様子や、鯨が意を得て自在に動き回る一方で、海を生活の場とする現地の人たちが畏れおののく様子が描かれる。「鬪衣」は南方特有の毛織物の衣服、「髻首」も「淮南子」齊俗訓に「三苗は髻首」と見られる異民族獨特の髪束の束ね方である。以下は翌日に何事もなかったかのように波が引いていき、初句のような静けさに戻る様が描かれており、その落差が高潮の凄まじさを際立たせる効果を生んでいる。このように、だいたい三年に一度起こる高潮の光景を、そのめったに見られない珍しさを伝えるためか誇張した表現を多く用いて描寫している。

この「沓潮」という自然現象に關しては、劉禹錫より時代は下るが、晩唐の劉恂が嶺南の様々な風土風俗を記録した『嶺表錄異記』にも、その様子が記載されている。

沓潮は、廣州は大海を去ること、二百里を遠^たでず。毎年八月、潮水最も大なり。秋中に復た颶風多し。其の潮水の未だ盡くは退かざるの間に當たりて、颶風作りて潮又た至り、遂に波濤岸に溢れ、人と廬舎を淹没し、苗稼を蕩失し、舟船を沉溺するに至る。南中之を沓潮と謂う。或いは十數年に一たび之有り。

劉禹錫と同様に高潮の凄まじさが語られているが、言説の性格の違いはあるにせよ、読み手が受ける印象は「沓潮歌」と随分異なっている。『嶺表錄異記』の記述が、人や家屋を呑み込み、田畑を根こそぎえぐり、舟を沈没させるような甚大な被害を及ぼすその恐ろしさについて語られているのに對して、劉禹錫はただ大自然の驚異に感嘆するかのごとき口調で語られている。恐れおののく現地の人の様子は描かれていても、具體的な被害について觸れられることはない。具體的な被害が語られないのは、自然の脅威に感嘆した自身の素直な感想がそ

のまま描かれているからであろう。

なお、『嶺表録異記』の中で「颶風」という言葉が見られるが、この颶風を思わせる自然現象に關しては、陽山に左遷された韓愈がしばしば言及している。

雷威固已加 雷威 固より已に加わり

颶勢仍相借 颶勢 仍ち相い借る

氣象杳難測 氣象 杳として測り難く

聲音吁可怕 聲音 吁 怕るべし

颶起最可畏 颶の起こるは最も畏るべし

旬哮簸陵丘 旬哮うらうらして陵丘を簸まる

雷霆助光怪 雷霆 光怪を助け

氣象難比侔 氣象 比侔し難し

(縣齋有懷)

(赴江陵途中…)

だが、劉禹錫と異なり、いづれも理解しがたいものと自らの關心から早々に切り捨てて深く觀察しようとせず、その激しい氣象に恐怖を覚えてゐる。陽山は連州に屬する縣だが、連州に左遷された劉禹錫は、この韓愈詩のような見方で南方特有の氣象を語ったりはしないのである。もちろん、「杳潮歌」に關しては、高潮を自分で體驗した譯ではないため恐怖を感じないという理由も考えられる。だが、その點に關しては、むしろ自分が左遷された州以外の風土にも興味を覚えて樂府に描いた點にこそ留意すべきであろう。「杳潮歌」が作られた元和年間後期は、白居易や元稹が自身の左遷地より遙か南方にある嶺南の地を題材にした詩を應酬しているように、自身が左遷された土地以外の異域の風土や風俗にも關心を向け始めた時期である。そこには、中唐

の文人たちの異域に對する好奇心の擴大を讀み取ることができるのである。

ただ、ひとつ注意しなければならぬのは、劉禹錫は南方の恐ろしい自然にも好奇心を覚え、その風俗を氣味悪がって遠ざけたりしないが、一方で左遷地にいる悲哀を詠った文學も普通に見られることである。連州で作られた「南中書來」では、手紙を送ってくれた友人に對して以下のように答えている。

君書問風俗 君の書 風俗を問う

此地接炎州 此の地 炎州に接す

淫祀多青鬼 淫祀 青鬼多く

居人少白頭 居人 白頭少なし

旅情偏在夜 旅情 偏えに夜のみ在らんや

鄉思豈唯秋 鄉思 豈に唯だ秋のみならんや

每羨朝宗水 毎に羨む 朝宗の水

門前盡日流 門前 盡日流るるを

この詩では、氣温は高く、祭祀は邪教を祭り、長生きする人はほとんどいないと、連州の地に居りがたい郷愁を友人に訴えている。このように、異域の風俗を主題とする詩を離れてしまえば、これまでの文學の因襲に従って、從來どおり左遷地に居りがたい悲哀を詠うものとなってしまう。劉禹錫の文學全體から見れば、そうした詩の方が多くを占めるのかもしれない。この詩で嘆いているように、實際には朗州や連州が住みやすい土地だとは感じていなかっただろう。だが、こうした過ごしがたい環境に置かれても、異民族の風俗という自分にとって興味を持つ事柄を見出している。舊來の因襲にとらわれず、その風俗に積極的な價值を認めて、樂府に詠っていったところに意味がある

のである。

三 民俗を詠う樂府

前章では、「武陵書懷五十韻」、「蠻子歌」、「沓潮歌」を取り上げてその特徴を述べた。これらの作品は、同時代の中唐の文人たちの作品と比べて、嫌悪感や好奇心の度合いという点ではそれぞれ違いがあるが、南方特有の珍しい風土や風俗を詠うという方向性においては同じである。だが、劉禹錫はそうした範疇に収まらない「采菱行」、「挿田歌」、「畚田作」という樂府も制作している。本章では、これらの作品の検討を通じて劉禹錫の獨自性を明らかにしたい。

最初に「采菱行」から取り上げると、朗州で作られたこの樂府は、その序に「武陵俗嗜采菱。歲秋矣、有女郎盛遊于馬湖。薄言采之、歸以御客。古有采菱曲、罕傳其詞、故賦之以俟采詩者（武陵の俗は采菱を嗜む。歲秋なりて、女郎の盛んに馬湖に遊ぶ有り。薄か言に之を采りと、歸りて以て客に御む。古に采菱の曲有れども、其の詞を傳うること罕なり、故に之を賦して以て采詩の者を俟つ）」と見える。この序では、土地の歌を採取してその歌詞を賦したと述べており、あたかも土着の歌の歌詞をそのまま詩句として採録したかのような印象を與える。だが、詩の最後では望郷の思いが綴られており、民間歌謠に借りて劉禹錫本人の心情が述べられた、劉禹錫自身の歌詞による樂府だと言える。なお、「武陵」とは朗州の舊稱で、「馬湖」は朗州の西北にある白馬湖のこと。その地で女性達が菱を採る朗州の風俗の様子が描かれていく。

白馬湖平秋日光 白馬 湖平らかなり 秋日の光
紫菱如錦綵鴛翔 紫菱 錦の如く 綵鴛翔る

劉禹錫の異文化認識

盪舟遊女滿中央	盪舟の遊女 中央に滿ち
采菱不顧馬上郎	菱を采りて馬上の郎を顧みず
爭多逐勝粉相向	多を争い勝ちを逐いて紛として相い向かい
時轉蘭橈破輕浪	時に蘭橈を轉じて輕浪を破る
長鬢弱袂動參差	長鬢 弱袂 動くこと參差たり
釵影釧文浮蕩漾	釵影 釧文 浮かぶこと蕩漾たり
笑語哇咬顧晚暉	笑語 哇咬として晚暉を顧み
蓼花緣岸扣舷歸	蓼花 岸に緣りて舷を扣いて歸る
歸來共到市橋步	歸來 共に到りて市橋に歩き
野蔓繫船萍滿衣	野蔓 船に繫ぎ萍は衣に滿つ
家家竹樓臨廣陌	家家の竹樓 廣陌に臨み
下有連橋多估客	下に連橋有りて估客多し
攜觴薦苳夜經過	觴を攜えて苳を薦めて夜經過し
醉蹋大應相應歌	酔いて大蹋を應みて歌に相い應ず
まず、水を滿面にたたえた湖に差し込む秋の日の光や、錦と見まごう紫の菱の葉という光景から歌が始まる。續いて、菱の實の收穫數を競い合う女性達の喧しい様子を、髪や服装、装身具を描くことであてやかに寫し出し、家に歸ってきた後は夜通し宴會に興じる様子が描かれる。そして最後は、	
屈平祠下沅江水	屈平祠下 沅江の水
月照寒波白煙起	月は寒波を照らして白煙起こる
一曲南音此地聞	一曲 南音 此の地に聞き
長安北望三千里	長安 北望 三千里

と、中原とは異なる音楽を聴くことで、自分が異郷の地にいることをふっと思い出す。望郷の悲哀で締め括られる構成になっているが、そ

れまでの描寫は、土着の民が樂しげに生活する姿を好意的に描いてい
る。

次いで連州で作られた「挿田歌」を見てみると、この樂府も序に
「連州城下、俯接村墟。偶登郡樓、適有所感。遂書其事爲俚歌、以俟
采詩者（連州城下、村墟に俯接す。偶たま郡樓に登りて、適たま感ず
る所有り。遂に其の事を書して俚歌と爲し、以て采詩の者を俟つ）」
と述べており、田植えの様子を地元の歌になぞらえて作られている。
田植え歌という土着の歌謠を取り入れているが、その前半部は以下に
示すように、「采菱行」と同じく劉禹錫自身の視點からその様子が描
かれている。

岡頭花草齊	岡頭	花草齊しく
燕子東西飛	燕子	東西に飛ぶ
田腔望如綫	田腔	望むこと綫の如く
白水光參差	白水	光ること參差たり
農婦白紵裙	農婦	白紵の裙
農夫綠簑衣	農夫	綠簑の衣
齊唱田中歌	齊唱して	田中に歌えば
嚶儻如竹枝	嚶儻として	竹枝の如し
但聞怨響音	但だ聞く	怨響の音
不辨俚語詞	辨ぜず	俚語の詞
時時一大笑	時時	一に大いに笑い
此必相嘲嗤	此れ必ず相い	嘲嗤す
水平苗漠漠	水平らかに	苗漠漠たり
煙火生墟落	煙火	墟落に生ず
黃犬往復還	黃犬	往き復た還り

赤雞鳴且啄 赤雞 鳴き且つ啄む

ここには、土着の歌を歌いながら田植えにいそむ田園ののどかな
風景が主に描かれている。土着の言葉で歌っているため歌詞が分から
ず怨嗟の聲色しか理解できないが、時々大いに笑っているので相手を
からかったのだと推測するなど、この樂府も南方獨特の風俗を描いて
いながら、前章で取り上げた「武陵書懷五十韻」「蠻子歌」「沓潮歌」
や、他の中唐文人たちの異域の風俗を詠った詩とは随分受ける印象が
異なっている。その起因するところを考えてみたい。

まず、歌われる題材という面からいえば、「采菱行」も「挿田歌」
も、異民族の奇抜な風俗を描いているのではなく、農作業という日常
的な光景を描いている。しかしその點では、例えば元稹が江陵に左遷
された時期に作られた「賽神」「競舟」「茅舍」も、祭祀やお祭り、住
居の様子を主題にしており、土着の民の生活する様子を描いたものと
いえよう。だが、「賽神」「競舟」は祭りや年中行事というハレの場
(非日常)を詠っており、ふだんの生活であるケ(日常)を詠った
「采菱行」「挿田歌」とは方向性が異なっている。更に大きな違いは、
元稹詩は否定的な方向での違和感を出発點としてその風俗が綴られて
いるところにある。「賽神」「競舟」「茅舍」は、出だしが全て「楚俗
不○○」と否定から始まるものがそれを端的に表しており、例えば
「賽神」は、

楚俗不事事	楚俗	事に事えず
巫風事妖神	巫風	妖神に事う
事妖結妖社	妖に事えて	妖社を結び
不問疏與親	疏と親とを	問わず
年年十月暮	年年	十月の暮れ

珠稻欲垂新 珠稻 新を垂れんと欲す
 家家不斂穫 家家 穫を斂めず
 賽妖無富貧 妖を賽りて富貧無し
 殺牛貫官酒 牛を殺して官酒を貫り
 椎鼓集頑民 鼓を椎ちて頑民集う
 喧闐里閭隘 喧闐として里閭隘く
 兇酗日夜頻 兇酗 日夜頻りなり
 兇酗 日夜頻りなり

というように、仕事をせず收穫をおざなりにして連日邪神の祭りにいそしむ土着の民を許容できず、文化が缺けていることを、傳統的な中華文明による視點から批判的に描いている。一方で劉禹錫の「挿田歌」は、歌詞は理解できなくとも楽しそうに歌い談笑しながら農耕にいそしむ人々の姿に興味を覚え、その價值を認めて記録に留めようとする。そうしたところに、元稹のこれらの三詩と「采菱行」「挿田歌」との違いが認められる。

では、南方獨特の風土や風俗を肯定的に認識している「武陵書懷五十韻」などの作品と、「采菱行」「挿田歌」との違いはどこにあるのか。同じく元稹の詩を例に挙げると、「和樂天送客遊嶺南二十韻」は、これまで「蠻夷」の地と見なされてきた嶺南に、異文化としての價值を認めており、中唐元和期の詩の中でも、異文化的な要素を最も強く打ち出している詩である。その一部を抜粋すると、

波心踴樓閣 波心 樓閣に踴り
 規外布星辰 規外 星辰を布く
 狒狒穿筒格 狒狒は筒を穿ちて格ち
 猩猩置屐馴 猩猩は屐を置きて馴らす
 貢兼蛟女絹 貢は蛟女の絹を兼ね

劉禹錫の異文化認識

俗重語兒巾 俗は語兒の中を重んず
 舶主腰藏寶 舶主 腰に寶を藏し
 黃家砦起塵 黃家 砦に塵起く
 歌鍾排象背 歌鍾 象の背に排ね
 炊爨上魚身 炊爨 魚の身に上る

と詠っている。この詩は類を見ない程の自注の多さに特徴があり、そこには南方だからこそ見られる星座、人間のような行動をとる猿、舶來の人などが行き交う雑踏の賑やかさ、象の背で歌や演奏を披露する藝人など、異文化を感じさせる様々な素材が列擧されている。このように、嶺南の異文化に興味を覚えて肯定的に捉えているが、それでもなお、劉禹錫の「采菱行」や「挿田歌」と比べると、どちらも第三者の視點から異域を描いていながら、読み手が受ける印象は随分異なっている。そう感じさせる最も大きな理由は、中原の價值觀から見て珍しい、異常なものを羅列するという、その羅列の行爲自體にあるだろう。その地特有の珍しいものばかりを並び立てるといふ行爲は、それ自體に一定の評価、選別が働いている。蠻夷の地と見なされた地域であっても、全てが中原と異なっているわけではない。中原地域でも見られる素材や風景も存在しているはずである。元稹の嶺南を描いた詩のような、珍しいものばかりを羅列する詩は、逆に言えば、中原地域にも見られる素材を無視して詩中に描かないといえる。こうした偏りが、南方左遷地の風俗は中原地域と本質的に異なっていると最初から決めつけて、南方特有の素材だけにこだわっているような意識を読み手に感じさせるのである。その點では、前半に取り上げた劉禹錫自身の「武陵書懷五十韻」「蠻子歌」なども、同様の傾向が見られると言える^⑬。

一方で、「挿田歌」では、先ほど引用した、土着の田植えの歌の様子を綴った後は、「水平苗漠漠、煙火生墟落。黃犬往復還、赤雞鳴且啄（水平らかに苗漠漠たり、煙火 墟落に生ず。黃犬 往きて復た還り、赤雞 鳴きて且つ啄む）」と續けられる。満面に水をたたえた水田に漠々と廣がる苗、村落に生じる竈の煙、犬や鶏などは、農村なら場所を選ばずどこでもごく普通に見られる光景である。そうした光景に、土着の歌謠など南方獨特の要素が組み込まれて、いずれも均等に扱われている。つまり、「采菱行」も「挿田歌」も、南方獨特の風俗を書き記すと序に明記しながら、その地獨特な素材にこだわらず、おだやかな日常生活の光景も描き出している。そうした點に、他の文人には見られない劉禹錫の獨自性が認められるのである。

最後に挙げる「畚田作」は、夔州での燒畑農業を詠った樂府である。燒畑は杜甫をはじめとして、元稹や白居易などの詩句にもよく見られるが、これを主題とした詩は劉禹錫が最初となる。

何處好畚田	何處にか好き畚田あらん
團團縵山腹	團團たる縵山の腹
鑽龜得雨卦	龜を鑽きて雨の卦を得
上山燒臥木	山に上りて臥木を燒く
驚驛走且顧	驚驛 走り且つ顧み
羣雉聲啾啾	羣雉 聲は啾啾たり
紅燄遠成霞	紅燄 遠く霞を成し
輕煤飛入郭	輕煤 飛びて郭に入る
風引上高岑	風引きて高岑に上り
獵獵度青林	獵獵として青林を渡る

青林望靡靡	青林 望めば靡靡たり
赤光低復起	赤光 低く復た起つ
照潭出老蛟	潭を照らせば老蛟出で
爆竹驚山鬼	竹を爆 <small>さ</small> げば山鬼驚く
夜色不見山	夜色 山見えず
孤明星漢閒	孤り星漢の閒に明らかなり
如星復如月	星の如く復た月の如く
俱逐曉風滅	俱に曉風を逐いて滅す
本從敲石光	本は敲石の光に従るも
遂致烘天熱	遂に烘天の熱を致す
下種煖灰中	下に種う 煖灰の中
乘陽拆芽孽	陽に乗じて芽孽 <small>がげつひら</small> 拆く
蒼蒼一雨後	蒼蒼たる一雨の後
苔穎如雲發	苔穎 雲の如く發す
巴人拱手吟	巴人 手を拱 <small>こまね</small> きて吟じ
耕耨不關心	耕耨 心に關せず
由來得地勢	由來 地勢を得
徑寸有餘陰	徑寸に餘陰有り

劉禹錫以前の燒畑農業に觸れた詩は、單に土着の異民族がそうした農法を行つてゐることを記すに止まっていた。中唐元和期になつて具體的な描寫も見られるようになるが、「米は澀なくして畚田鉏すく解あわす」（白居易「得微之到官後書備知通州之事悵然有感因成四章」其一）、「田は畚刀を仰ぎて牛を用いること少なし」（元稹「酬樂天得微之詩知通州事因成四首」其一）、「田疇 火を付して耘鋤を罷やむ」（同其二）など、耕作をしない原始的な面しか着目されなかったり、精米してお

らず不味いと述べられたりと、否定的な観点から語られるに過ぎなかった。だが、劉禹錫のこの樂府では、この南方亞熱帶獨特の農法で農業を行う様子そのものに興味を示し、緩やかな傾斜の山腹に吉日を選んで焼き始めるところから詩が始まる。森林が焼かれていく光景に魅入っているかのように、その様子を仔細に描き出すことが詩の中心となっている。この「畚田行」は、南方獨特の燒畑農業を題材としており、「采菱行」や「插田歌」のような、どの農村でも見られる日常のありふれた光景を描いているわけではない。しかしながら、詩の内容は南方の地獨特の素材だけにこだわることなく、自ら目にした光景をありのままに詳しく綴っており、これまで原始的と見なされてきた燒畑農業に、その個性と價値を認めている。農業にいそむという點では、中原の民と變わりない姿を描き出しているのである。

このように、劉禹錫のこれらの樂府は、民族や地域が異なりながらも、そこに中原に住まう人々と變わらぬ生活感があることに價値を見出している。他の文人たちのように、中原には見られない奇怪な素材だけに着目しているわけではない。では、何故劉禹錫だけが他の中唐の文人とは異なる方向性を見せているのか、最後に「竹枝詞」を取り上げて彼の異域に對する認識の根底にあるものを考察したい。

四 「竹枝詞」

劉禹錫の代表作「竹枝詞九首」は、夔州刺史の任にあった時に作られたとされ、文學史上においても中原とは異なる南方の民間歌謠に學び、それを採り入れたものとして評價されている。その序には次のように書かれている。

四方の歌は、音を異にすれども樂を同じくす。歲正月、余建平に

來り、里中の兒、竹枝を聯歌し、短笛を吹き鼓を撃ちて以て赴節す。歌う者、袂を揚げ睢舞し、曲多きを以て賢と爲す。其の音を聆くに、黃鐘の羽に中る。卒章激訃なること吳聲の如く、淇澳として分かつべからずと雖も、而も含思宛轉とし、淇澳の豔有り。昔屈原沅湘の間に居り、其の民神を迎うるに、詞に鄙陋多し。乃ち爲に九歌を作り、今に到るも荊楚之を鼓舞す。故に余も亦た竹枝詞九篇を作り、善く歌う者をして之を颺げしめ、末に附す。後の巴歛を聆くもの、變風の焉よりするを知る。

「竹枝詞」に關する論稿は數多くあり、その音樂性や、屈原や杜甫詩との關連などについては先行研究に譲りたい。本稿で注目したいのは、冒頭の「四方の歌は、音を異にすれども樂を同じくす」という言辭である。このように表現した劉禹錫の意識は次のように説明できるのではないだろうか。異域の音樂は、表面上は異なっているとしても、その本質は同じなのである、と。つまり、劉禹錫が「竹枝詞」を作った動機は、その異なっている面に着目したからではなく、同じであると認識した方にある。そしてそれこそが、他の中唐の文人達、これまでの異文化認識とは決定的に異なっている點なのである。

劉禹錫以外の中唐の文人たちの詩には、

遠地觸途異、遠地 途に觸れて異なり

吏民似猿猴、吏民 猿猴に似たり

(韓愈「縣齋有懷」)

郡城南下接通津、郡城 南に下りて通津に接す

異服殊音不可親、異服 殊音 親しむべからず

(柳宗元「柳州峒氓」)

漸覺鄉原異、漸く郷原の異なるを覺え

深知土產殊、深く土産の殊なれるを知る

(白居易「東南行一百韻」)

況南方物候飲食與北土異、況んや南方の物候飲食は北土と異な

れり

(元稹「送崔侍御之嶺南二十韻」序)

というように、いずれも「異」や「殊」という語彙を用いて、南方異域への違和感を示した例が見られる。當然といえば當然だが、異域の風土や風俗はその「異」なる面に着目するからこそ、異域と表現されるのである。また、こうした語彙を用いなくとも、彼らが南方異域の風土や風俗を主題にした詩は、否定的な方向にせよ、肯定的な方向にせよ、中原とは異なる風土や風俗への違和感から描かれたものだと見える。そのため、彼らが南方特有の風土や風俗を主題にした詩は、前章の元稹詩などのように、その地特有の素材しか列擧されないのである。

だが、劉禹錫だけは、左遷地の風俗を述べた詩の中で、「異」や「殊」という語彙を用いてその違和感を述べた例は見られない。それは「竹枝詞」に至って言語化されたこうした認識が、左遷當初から潜在的にあったことを意味していよう。最初に異域の風俗を描いた「武陵書懷五十韻」でも、朗州特有の素材ばかり並び立てるといふ價值基準は働いているけれども、その序で「顧山川風物、皆騷人所賦、乃具所聞見而成是詩(山川風物を顧みるに、皆騷人の賦す所なり、乃ち聞見する所を具にして是の詩を成す)」と述べているように、朗州の自然や風俗が屈原の賦した内容と同じだから詩にしたと説明しており、中原の風俗と異なるから詩にしたとは言っていないのである。もちろん、「采菱行」にせよ、「插田歌」にせよ、中原とは異なる風俗を描く

ことを出發點にしている點は、他の中唐文人たちと變わりない。だが、劉禹錫の異文化認識の根底には、異域の風俗といつてもその本質は變わらないという意識が働いている。そのため、他の文人たちの詩と違って、南方特有の風俗だけでなく、どの地でも見られるありふれた日常生活の光景も描き出されるのである。

こうした認識を受け繼いで作られた「竹枝詞」も、同様の特徴が認められる。いくつか引用すると、

山桃紅花滿上頭 山桃紅花 上頭に滿ち

蜀江春水拍山流 蜀江春水 山を拍ちて流る

花紅易衰似郎意 花紅の衰え易きは郎の意に似たり

水流無限似儂愁 水流の限り無きは儂の愁いに似たり

(其二)

瞿塘嘈嘈十二灘 瞿塘嘈嘈たり十二灘

此中道路古來難 此の中道路 古來難し

長恨人心不如水 長く恨む 人心の水に如かざるを

等閒平地起波瀾 等閒に平地 波瀾起く

(其七)

山上層層桃李花 山上層層たり 桃李の花

雲間煙火是人家 雲間の煙火は是れ人家

銀釧金釵來負水 銀釧 金釵 來りて水を負い

長刀短笠去燒畚 長刀 短笠 去りて畚を焼く

(其九)

まず、作品に對する詩人の立ち位置という點では、「采菱行」や「插田歌」は、民間歌謠を採取して詩句にしたと序でいっておきながら、詩中では劉禹錫自身の心情も描かれており、文人の視點から詩が

作られていた。だが「竹枝詞」は、土着の民衆になりかわって歌われており、劉禹錫自身の心情が語られることはない。そのため、「采菱行」や「挿田歌」と比べて、その地の民情をそのまま寫し取ったかのような内容となっている。

そして、その語彙自體は、其二では「郎」「儂」など六朝の吳歌を感じさせる方言が用いられ、また、其七では三峽下りの難所である瞿塘峽を取り上げているように、其一から其八まですべて夔州周辺の地名が入れられており、其九では燒畑の様子が描かれるなど、地方色が全面に打ち出されている。だがそこには、戀の愁いを絶え間なく流れるのだから瞿塘峽の激しい流れの方がまだましだと恨んだり、夔州周辺の地名を用いながら、そこだけに限られる抒情ではない。もちろん、こうした抒情性は六朝以來の樂府の傳統にも繋がる。しかし従來、文人が樂府を作る際は、文人としての發想や表現手法などによって作り直していたのだった。一方劉禹錫は、文人としての作者を抑えて、民歌そのものの體裁をそのまま表そうとする。そこには民俗が異なることに拘ることなく、民衆側の視點に立とうとする劉禹錫の態度が感じられよう。

このように「竹枝詞」は、どの地の民衆でも、普遍的に見られるような戀愛の苦しみを描き出している。風俗は違えど人間の営みに、漢民族も異民族も本質的な違いはなく、中原の地でも蠻夷の地でも同じように生活している。「竹枝詞」を初めとする劉禹錫の樂府からは、そういった意識が感じられる。本稿の冒頭で、中唐文人の中で南方異域の風俗を描く際に樂府を用いるのは劉禹錫だけである點を指摘したが、その由來するところもこれまで明らかにした内容から讀み取れる

ように思う。言語や見た目が違えども、異域の風俗は中原と本質的には同質であると劉禹錫は認識しており、南方異域の風俗を何故描くのかという出發點から他の文人達と異なっている。その認識の違いが、劉禹錫だけに樂府體を選ばせ、民間の歌を採取して民情を描き出すという姿勢をとらせたといえよう。その樂府の歌辭は劉禹錫の手になるものにせよ、土着の歌謠を意識させる句がふんだんに盛り込まれている。そして土着の歌謠というのは、まさに地方文化そのものといえるが、他の中唐文人のように地方の文化を異質なものと見て距離を置いている限りは、民間の歌を採取して自身の作品に留めようとする立場に立ちえないからである。劉禹錫は樂府という詩體を積極的に用いることで、元稹のような異域の地の異質な面だけに着目するという従來の異文化認識を打ち破っている。その認識の變化は、蠻夷の地という認識を打ち消して、その地の風俗を一つの地方文化として認めていくことへと繋がっていく。こうした點に、彼の文學の大きな特徴があるのではないだろうか。

中唐以前、蠻夷に住まう民衆に對する認識というのは、目に映っても意識されることはなく、詩中に描かれることはほとんどなかった。韓愈に至って描寫されるようになり、最初は猿のように嫌悪される存在として描かれるのを皮切りとして、中唐文人たちによって様々に表現され、各々の個性が発揮されていく。その中で劉禹錫は、「蠻子歌」や「莫徭歌」のように、異民族の風俗を積極的に觀察していったことも重要である。だが、劉禹錫の獨自性は、異域の風俗を描きながら、どの地でも普遍的に見られるような光景も描き出しており、中原に住まう人々と變わらぬ生活感があることに價値を見出していることにあ

る。そのため、こうした光景には、異文化の「異」という要素が希薄になっていくようにも感じられる。

この問題を考えるに際し、蘇軾が海南島に左遷された際に異民族である黎族の各家を訪問した詩、「被酒獨行遍至子雲威徹先覺四黎之舍三首（酒を被りて獨り行き遍く子雲・威・徹・先覺四黎の舍に至る三首）」⁽¹⁾を引用したい。

半醒半醉問諸黎 半ば醒め半ば酔いて諸黎を問う
 竹刺藤梢步步迷 竹刺 藤梢 歩歩に迷う
 但尋牛矢覓歸路 但だ牛矢を尋ねて歸路を覓め
 家在牛欄西復西 家は牛欄の西復た西に在り

この詩は山本和義氏が指摘しているように、異民族と交わりながらも蠻夷の地にいる違和感を全く感じさせないが、それと同時に、異文化としての要素も感じられない。中原の農村でも普遍的に見られるような光景を描き出しており、海南島の風土風俗を異質に感じることすらなく、異民族と交わり合っている。異域であっても表面上の風俗や習慣が異なるだけで、その本質は我々と同じであると認識しているからこそ、このように描きえるのだろう。こうした詩こそが、真に土着の民衆と融和した作品といえるのかもしれない。劉禹錫が「竹枝詞」の序で示した「四方の歌は、音を異にすれども樂を同じくす」という精神は、蘇軾の文學へと確かに繋がっていくのである。

注

(1) 劉禹錫各作品の引用は瞿蛻園『劉禹錫集箋證』（上海古籍出版社 一九八九年）を用いるが、諸本に依り改めた箇所もある。注は蔣維崧等

『劉禹錫詩集編年箋注』（山東大學出版社 一九九七年）、陶敏等『劉禹錫全集編年校注』（嶽麓書社 二〇〇三年）、高志忠『劉禹錫詩編年校注』（黑龍江人民出版社 二〇〇三年）を参照した。

(2) この方面からのアプローチに關しては、既に齋藤茂氏の「劉禹錫の樂府詩について」（『中國詩文論叢』第七集 一九八八年）第二章の中で、彼が積極的に土俗や俚歌に關心を寄せたことが、民間歌謠との關連を中心に詳しく述べられている。

(3) 拙論「蠻夷の光景——中唐の異文化受容史」（『中國文學報』第七十二冊 二〇〇六年）九七頁参照。また、劉禹錫が朗州の風俗に着目したことについては、石村貴博氏が「朗州司馬期の劉禹錫」（『中國語中國文化』第6號、二〇〇九年）の中で論及している。

(4) 拙論「蠻夷の光景」第三章、「元稹の異文化認識——白居易との應酬を中心に」（『中國文學報』第七十六冊 二〇〇八年）第二章参照。

(5) 第二章第二節「來自異質文化與社會與論的強大壓抑」一〇二頁参照（蘭州大學出版社 二〇〇四年）。

(6) 尚永亮主撰『唐五代逐臣與貶謫文學研究』（武漢大學出版社 二〇〇七年）では、韓愈、柳宗元、劉禹錫、白居易、元稹の左遷された土地のうち、白居易の左遷された江州と、元稹の左遷された江陵は江南東西道に屬し、他の左遷地と比べて條件がやや良かったと述べている（三二二頁）。

(7) 原文「禹錫在朗州十年、唯以文章吟詠、陶冶情性。蠻俗好巫、每淫祠鼓舞、必歌俚辭。禹錫或從事於其間、乃依騷人之作爲新辭、以教巫祝。故武陵谿洞間夷歌、率多禹錫之辭也」。

(8) 拙論「蠻夷の光景」第三章で、連州に住まう異民族「莫徭」を描いた劉禹錫の「莫徭歌」と、柳州の異民族を題材とした柳宗元の「柳州峒氓」とを比較して、こうした特徴を持つことを指摘した。

(9) 原題「赴江陵途中寄贈王二十補闕李十一拾遺李二十六員外翰林三學士」。

- (10) 柳宗元が永州の風俗を述べた詩句に「遠物 青巖を裁ち、時珍 白鷗を饌う」(「酬韶州裴曹長使君寄道州呂八大使因以見示二十韻」)、「寒さを御ぐに衾は罽を用い、水を挹むに勺は仍ち椰」(「同劉二十八院長述舊言懷感時書事奉寄夔州張員外使君五十二韻之作因其韻增至八十通贈二君子」)とある。拙論「蠻夷の光景」第三章参照。
- (11) 原文「沓潮者、廣州去大海、不遠二百里。每年八月、潮水最大。秋中復多颶風。當其潮水未盡退之間、颶風作而潮又至、遂至波濤溢岸、淹沒人廬舍、蕩失苗稼、沉溺舟船。南中謂之沓潮。或十數年一有之。……」(「叢書集成初編」に依る)。
- (12) これらの詩の特徴に關しては、拙論「元稹の異文化認識」第四章を參照。
- (13) 拙論「蠻夷の光景」と「元稹の異文化認識」の中で取り上げた「莫徭歌」や「競渡曲」も同様の特徴が認められる。
- (14) 拙論「元稹の異文化認識」第二章參照。
- (15) 拙論「元稹の異文化認識」一三二～一三五頁參照。
- (16) 劉禹錫と元稹の詩の肌觸りが異なるのは、劉禹錫の詩が民間の歌謠を意識して作られたことも大きな理由である。俚歌の面からのアプローチに關しては、齋藤茂氏の「前掲論文七六～七七頁參照」。
- (17) 原文「四方之歌、異音而同樂。歲正月、余來建平、里中兒聯歌竹枝、吹短笛擊鼓以赴節。歌者揚袂睢舞、以曲多爲賢。聆其音、中黃鐘之羽。卒章激訐如吳聲、雖儉儻不可分、而含思宛轉、有淇澳之豔。昔屈原居沅湘間、其民迎神、詞多鄙陋、乃爲作九歌、到于今荆楚鼓舞之。故余亦作竹枝詞九篇、俾善歌者颺之、附于末。後之聆巴歎、知變風之自焉」。
- (18) こうした「竹枝詞」の特色に關しては、中純子氏の『詩人と音楽―記録された唐代の音―』(知泉書館 二〇〇八年) 四一頁などを參考にした。

(19) 『蘇軾』(筑摩書房 一九七三年) 二〇七頁參照。